書評

小野容照著

朝鮮獨立運動と東アジア
――一九一〇―一九二五――

松田利彦

一

朝鮮獨立運動史についての研究は、韓國を中心に活潑に展開されてきたが、その分、時期別・地域別に細分化が進んでいる。また、韓國でも朝鮮民主主義人民共和國（北朝鮮）でも各々の國家の正統性を植民地期の獨立運動に置いているために、獨立運動史研究が兩國におけるナショナル・ヒストリーの枠組みを再生産し強化してきたとの問題點を指摘する論者もいる。[1] 他方、日本の植民地期朝鮮史研究においては、獨立運動史研究はかつての中心的位置を支配政策史研究や文化史研究にゆずって久しい。

こうした狀況のなかで朝鮮獨立運動を正面からテーマに据えた書を刊行することは、それ自體一つの挑戰だといえよう。黎明期の朝鮮獨立運動史の大きな流れを、韓國「併合」（一九一〇年。以下、括弧を省略する）以後の朝鮮人日本留學生の運動から第一次世界大戰後の社會主義運動の萌芽にいたる過程に見いだし、獨創的な枠組みによって捉えなおそうとしたのが、本書『朝鮮獨立運動と東アジア――一九一〇―一九二五――』である。膨大な先行研究の蓄積を消化しながら、新たな獨立運動史研究の地平を切り開こうとした小野氏のチャレンジ精神にまず敬意を表したい。

以下、本書の內容紹介と批評に進みたい。

二

序章と終章を除く本書の章立ては次の通りである。

第一章　在日朝鮮人留學生の民族運動の胎動――「韓國併合」直後――
第二章　在日朝鮮人留學生の出版活動――朝鮮人留學生、朝鮮民族運動と日本人實業家――
第三章　在日朝鮮人留學生の獨立運動――中國人・臺灣人留學生と朝鮮人留學生――
第四章　三・一運動後の朝鮮における社會と思想の變動
第五章　東アジア共產主義運動と朝鮮――上海派高麗共產黨國內支部の誕生――
第六章　日本における朝鮮人社會主義運動の發生と展開――北風派共產主義グループの形成過程――

序章では、韓國併合後における在日朝鮮人留學生の運動および一九一九年の三・一獨立運動後の社會主義運動を對象としながら、「朝鮮人による朝鮮固有の運動として捉えられがちな朝鮮獨立運

動を、東アジア全體の社會・運動・思想狀況との相互關係のなかで展開した運動として捉えなおす」（五頁）という視角を採用する、とされている。これは、從來の研究が、朝鮮一國史という限定的な枠組みによって分析されてきたことに對する批判にもとづく。そして、朝鮮獨立運動が展開していくための「外的條件」（他國からの思想や理論の朝鮮への流入、朝鮮人活動家による日本での出版活動にともなう日本人出版業者との取引など）に着目し、朝鮮人活動家と東アジア知識人の間の人的ネットワークの復元を目ざす、としている。

第一章は、在東京朝鮮留學生親睦會の活動を中心に、韓國併合後の在日朝鮮人留學生の運動を檢討している。

日露戰爭後、アジア諸民族にとって日本は近代文明を攝取するための重要な據點となった。日本に來た朝鮮人留學生もまた日本で出版物を發行し、韓國（大韓帝國）社會への啓蒙活動をおこなった。彼らは中國人やベトナム人と交流する意思はもっていたが、基本的には自力で韓國植民地化への抵抗運動を進めていた。韓國併合以降、最初の在日朝鮮人留學生の統合團體となった在東京朝鮮留學生親睦會（一九一一年結成。以下、「親睦會」とする）は、併合前の留學生團體・大韓興學會の後繼團體であることを意識しつつも、韓國社會への啓蒙を目ざしていた大韓興學會とは對照的に、政治的要素を排し朝鮮人留學生の親睦と學問の奬勵をかかげた。親睦會は設立の約半年後、一九一二年四月に學術・親睦的性格の強い機關誌『學界報』を創刊した。しかし、機關誌刊行の動きを察知した日本官憲から朝鮮留學生監督部（併合前に韓國政府が東京に置いていた留學生監督部を改編して朝鮮總督府が管轄した留學生の監視・援助機關）に內訓がおり、『學界報』創刊と引きかえに親睦會は解散させられた。親睦會の運動は、このように出版物の刊行に重點を置くものだったが、日本人の手を極力借りずに進めようとした點に特徵がある。

第二章は、一九一〇年代の朝鮮人留學生の多樣な出版物について、その創刊・廢刊の經緯を見ながら、出版物刊行を可能にした條件と彼らの出版經驗を明らかにする。

前章に見た親睦會の解散後、一九一二年一〇月に在日朝鮮人留學生の代表機關として在日本東京朝鮮留學生學友會（以下、「學友會」とする）が結成される。著者は、學友會の機關誌『學之光』をはじめ、一九一〇年代後半以降、『基督青年』『女子界』など朝鮮人留學生の雜誌刊行が活潑化したことに注目し、それらがいずれも橫濱の福音印刷合資會社で印刷されていたことを指摘する。同社で印刷された朝鮮人の出版物は一三種にも及ぶという。同社の設立者・村岡平吉は、長老派のキリスト者であり賀川豐彥とも親交をもっていた。主にキリスト敎系の出版物を扱っていた福音印刷合資會社が朝鮮人留學生の出版に關わるようになったのは、同社が當時としては珍しいハングル活字をもっていたこと以外に、同社と緣の深い明治學院に朝鮮人が留學しており橋渡し役をしたことが大きい。朝鮮人留學生のなかには印刷會社に單に原稿を預けるだけでなく、そこで活版印刷の工程について學んだ者もいた。

次に、朝鮮人留學生の出版活動における資金調達の問題が檢討されている。特に發行が安定的に繼續していた『學之光』と『基督青年』の分析をつうじて、廣告收入が重要な役割をはたしてい

たこと、廣告主が日本組合基督教會の信徒の經營する小林富次郎商店と南湖院だったことを明らかにする。このように、一九一〇年代の在日朝鮮人留學生による出版活動においては、印刷についても廣告收入の面でも日本人キリスト教系實業家が深く關わっていた。もとより日本人キリスト者は朝鮮總督府の統治を是認しており、朝鮮人留學生の立場とは大きく異なっていた。しかし、「韓國併合直後の朝鮮人留學生が日本人の手を借りずに運動を展開しようとしていたことを想起すれば、これは極めて大きな方向轉換」だった（一〇一頁）。

第三章は、新亞同盟黨の設立經緯・目的・活動に焦點を合わせながら、一九一〇年代の在日朝鮮人留學生と中國・臺灣の留學生における人脈形成について考察する。一九一五年に東京で結成された新亞同盟黨は、三・一運動以前においては朝鮮獨立を目的とした數少ない團體であったのと同時に、中國・臺灣からの留學生もメンバーに含むという特徴をもっていた。この秘密結社は、對華二十一箇條要求によって中國が「第二の朝鮮」になるかも知れないとの危機感を抱いた中國人留學生（黄介民ら一〇名）と朝鮮人留學生（張德秀、金綴洙ら二〇名）に臺灣人（彭華英ら二名）が加わって組織された。新亞同盟黨は、日本の半植民地・植民地支配から朝鮮・中國・臺灣を解放してアジア平和を實現するために互いに協力することを目的とした。官憲の嚴しい監視のため一九一七年に解散し目立った活動はできなかったが、辛亥革命を體驗していたリーダー格の中國人留學生から朝鮮・臺灣の留學生は獨立運動の實踐經驗を學ぶことができた。

朝鮮人留學生についていえば、この經驗は間もなく活かされることになる。ウィルソン米大統領の民族自決主義の提唱（一九一八年）以降、三・一運動へと流れこむ海外在住朝鮮人と朝鮮國内の朝鮮人によるネットワーク形成には、新亞同盟黨に參加していた留學生が中心的役割を果たしていた。

以上の第一～三章における考察を通じて、著者は、「三・一運動以前の在日朝鮮人留學生の民族運動は、同時代の東アジア知識人・留學生、具體的には日本人キリスト者と中國人革命家に支えられながら展開されていた」（一三〇頁）と結論づける。

第四章以降は時代と對象を變え、日本留學を經驗した朝鮮人活動家が、三・一運動以降、朝鮮で社會主義勢力を形成していく過程を跡づける。

第四章では、まず、三・一運動直後の朝鮮における社會・文化・思想の變化を概觀する。三・一運動後の「文化政治」への轉換によって言論取締りが緩和されると、朝鮮人留學生が日本から朝鮮に情報を發信する時代は幕を下ろし、朝鮮内で發行された多くの總合雜誌が新思想傳達の媒體の役割を擔うようになった。そして、それらの朝鮮語雜誌においては、日本言論界と歩調を合わせ、社會の改造が必要だとの共通認識が示されていた。このような共通基盤に立って、朝鮮人知識人は日本思想界を改造の手本とし、日朝知識人の交流が促進されていく。三・一運動後の變化としては、勞働問題への關心の高まりもあげられ、一九二〇年四月には京城で朝鮮勞働共濟會が生まれた。

次に、朝鮮社會にマルクス主義が浸透していく過程について檢討されている。三・一運動後から一九二一年にかけ朝鮮の新聞・雜誌でマルクス主義學説が本格的に紹介されはじめるが、大半は

日本の出版物からの翻譯だったことを著者は指摘する。積極的にマルクス主義紹介につとめたのが朝鮮勞働共濟會で勞働問題に關わっていた朝鮮人知識人であり、社會革命黨、金若水グループ、金翰・申伯雨グループの三者から成っていた。なかでも社會革命黨の兪鎭熙は、いち早く一九二〇年にマルクス主義に立脚した勞働運動を展開することを主張した。一九二一年になると、日本の『社會主義研究』からの翻譯を中心にマルクス主義紹介文獻が增加しボリシェビズム理解も深まったが、これはコミンテルンの影響によるところが大きい。

第五章では、コミンテルンに連なる朝鮮最初の組織となる上海派高麗共產黨國內支部の設立過程を檢討する。上海派高麗共產黨の母體たる韓人社會黨（一九一八年にハバロフスクで結成、三・一運動後に上海に據點を移す）は、コミンテルンによる共產主義運動組織のエージェントとなり、東アジア各地で組織設立工作を擔當した。すなわち、韓人社會黨は一九二〇年一二月、朴鎭淳がコミンテルンの資金を携えてモスクワから上海に戻って以來、朝鮮・中國・日本で共產主義組織の設立を急速に進めたのである。一九二一年五月には上海派高麗共產黨を設立し、朝鮮に生まれていた前述の社會革命黨をその國內支部とした。また、中國では、黃介民の組織する大同黨に働きかけ、これをコミンテルンに連なる共產主義組織に轉換させた。同じ頃、臺灣人の彭華英や日本人社會主義者にも共產主義組織の設立を働きかけていた。

このように、上海派高麗共產黨國內支部の設立は、コミンテルン創立とその東アジアに對する働きかけ、つまり「東アジア規模で展開した共產主義運動の展開過程の一部」（一九二頁）として位置づけられるべきものだと著者は主張する。さらに、韓人社會黨がコミンテルンのエージェントとなって朝鮮・中國・臺灣で組織していった共產主義組織の母體には、第三章で見た新亞同盟黨によって一九一〇年代に築かれた人的ネットワークがあった。このことは、從來の新亞同盟黨が結節點となっていた反日本帝國主義を旗印とするネットワークが、ロシア革命とコミンテルン設立を契機に共產主義ネットワークに變容したことを示している。

第六章は、日本における朝鮮人社會主義運動勢力を母體として一九二四年に朝鮮內でうまれた共產主義グループ・北風派の形成過程を扱っている。まずコミンテルン文書によって、一九二〇年五月に朝鮮勞働共濟會內部で金若水グループがマルクス主義學習をはじめたことを確認する。ついで、一九二一年春に東京に據點を移した金若水グループの主力が金若水と鄭泰信だったこと、彼らが東京に移ったのは日本社會主義運動との聯携という目的があったことを明らかにする。そして金若水グループによる『大衆時報』（一九二一年五月創刊）の刊行について檢討し、學友會で活動經歷を積み出版物發行經驗をもつ卞熙瑢や、早くから日本人社會主義者に接觸していた元鍾麟などが、金若水・鄭泰信に不足していた活動經驗を補ったとしている。かくして、日本で朝鮮人が最初に刊行した社會主義雜誌『大衆時報』は、朝鮮から日本に活動據點を移した金若水らと、日本での活動經驗をもつ卞熙瑢ら在日朝鮮人留學生の合流によって生まれたのだった。

卞熙瑢は、『大衆時報』創刊と前後して上海の韓人社會黨の援助を受けつつ雜誌『前進』を刊行したが、その後一九二二年一一月、ふたたび金若水と合流し、日本で最初の朝鮮人社會主義團體

となる北星會を東京で結成した。著者は、北星會結成の背景について、黒濤會の分裂と見なす官憲資料の見解よりも他の要因を重視する。すなわち、上海派とイルクーツク派の高麗共產黨統合大會（一九二二年一〇月）が開催されたために日本で早急に共產主義組織を結成する必要を金若水が痛感したこと、信濃川朝鮮人勞働者虐殺事件（一九二二年七月）で在日朝鮮人勞働者の組織化が求められていたことを指摘する。北星會は、日本の社會主義運動と聯帶關係を構築しつつ、東京・大阪で朝鮮人勞働組合を組織した。しかし、一九二三年八月、朝鮮內での巡回講演會を契機に金若水ら主力は朝鮮內に移ることを選び、北風派を形成するにいたる。金若水が朝鮮內に基盤を築くにあたっては、コミンテルンに日本社會主義との密接な關係をアピールしえたことが大きかった。その意味で「北風派こそ、日本社會主義運動なくしては決して成立し得ない一派だった」（二五三頁）。

「終章」では、本書の考察を三つの視點から再整理している。第一に、朝鮮獨立運動と日本の社會運動や知識人との關係である。日本で朝鮮人留學生が修得した印刷技術が三・一運動後の朝鮮語メディアを支え、また、マルクス主義が日本經由で朝鮮に傳播したというように、「日本の知識人や思想界が朝鮮獨立運動に與えた影響は多大なものがあった」（二六一頁）。日本の社會運動との聯帶關係についていえば、三・一運動以前の朝鮮人留學生は日本人キリスト者と緊密な關係を築いていたが、第一次大戰後は、日朝社會主義者の聯帶の重要なファクターとしてコミンテルンが登場する。このような分析を通じて、日本の大正デモクラシー下での日朝聯帶という從來の二國閒的枠組みを超えた、朝鮮獨立運動と「世界との聯關」（二六五頁）という視角の重要性を強調している。

第二に、朝鮮獨立運動と中國の民族運動や知識人との關係である。一九一五年の對華二十一箇條要求を契機に、朝鮮・中國・臺灣の留學生が新亞同盟黨を結成した。一九一九年のコミンテルン成立後は、コミンテルンのエージェントだった韓人社會黨の働きかけによって新亞同盟黨の朝鮮人・中國人・臺灣人活動家はそれぞれに共產主義運動組織の設立を目ざした。このように、「一九一五年に日本のアジア侵略からの解放を目的として形成された朝鮮、中國、臺灣人留學生の國際聯帶の理念は、ロシア革命やコミンテルンの設立を背景として、反日本帝國主義から共產主義に變容した」とされる（二六七頁）。

最後に、臺灣の民族運動との關係について言及し、基本的には朝鮮と中國の活動家の聯帶が中心でそれに臺灣人活動家が附隨的に加わっていたこと、朝鮮人獨立運動家は日本や中國の社會運動から影響を受けつつ臺灣民族運動に對しては影響を與える立場にあったことを指摘している。

三

よい意味で讀者を裏切る本である。本書を手にする讀者の中には、書名を見て、すでに細部にわたって相當に明らかにされている朝鮮獨立運動史にどれほどの新味を加えられるのか、疑念を感じる向きもあろう。評者もその一人だったことを告白しなければならない。しかし、讀むにつれ、本書が切れ味のよい鮮やかな分析で朝鮮獨立運動史研究に新たな息吹を吹きこんでいることに強

く感銘を受けた。

本書の意義は、何よりも東アジアという規模で朝鮮獨立運動史の再檢討をおこなった點にある。冒頭で述べたように、朝鮮獨立運動史研究は、今日の國民國家批判の潮流の中で、閉鎖的なナショナル・ヒストリーの構築に資する結果になっているのではないかとの批判を受けてもいる。こうした議論をおそらくは意識しつつ、本書は、朝鮮獨立運動史を同時代の東アジア史に位置づけ、一國史を超えた廣がりの中で把握しようとした。一九一〇年代、新亞同盟黨につどった朝鮮人・中國人・臺灣人の運動家たちの人的ネットワークが、第一次世界大戰後の東アジア各國・地域で社會主義運動團體を組織する際に大きな役割を果たしたという事實は、本書の視角をもって初めて明らかにしえたといってよい。本書は、朝鮮獨立運動史という一見オーソドックスなテーマを對象としながら、すぐれて今日的な問題關心にもとづき、かつ、實證的手法を踏みはずすことなく、その重要性を再認識させることに成功している。

また、朝鮮史という一國史的枠組みに限定しても、本書は、多くのファクトファインディングに滿ちている。在東京朝鮮留學親睦會や在日本東京朝鮮留學生學友會の組織過程や、一九二〇年代初頭における朝鮮人知識人のマルクス主義受容、北星會の結成背景など、本書によって明らかにされたり既存の說が塗り替えられたりした事實は多い。とりわけ、朝鮮獨立運動のなかで在日朝鮮人運動と社會主義運動という別個に扱われる傾向のあった二つの領域の密接な關聯性を指摘した點は重要である。

さらに、朝鮮人運動家の印刷技術の習得や資金源など、これまであまり着目されてこなかった獨立運動の外的條件について細密に檢討した。第二章で明らかにされた福音印刷合資會社や小林富次郎商店、南湖院などの朝鮮人留學生支援は、日朝交流史の文脈でも注目されてよい。もっとも、獨立運動を支えた「外的條件」には、ほかにも、獨立運動據點間の通信・交通手段、朝鮮人運動家にとって新思想を學ぶ主な道具となった日本語と朝鮮語の言語的距離など檢討すべき問題は多く殘っていよう。

さて最後に、本書に感じたいくばくかの疑問點をあげておきたい。本書に內在する問題點は、終章で著者自身によってあらかた指摘されている。すなわち、東アジアを超えた「世界史的視點で朝鮮獨立運動を捉える視點が弱かった」こと、「朝鮮獨立運動と日本、中國、臺灣の社會運動・民族運動との國際聯帶における民族間の葛藤や對立」の檢討にいたらなかったこと、および、「分析對象を［中略］狹い意味での獨立運動に限定してしまったため、いくつもの重要な事例」――とりわけ朝鮮民族運動と臺灣民族運動との關係――に十分言及できなかったことなどである（以上、二六八～二六九頁）。いずれももっともな反省點と見受けるが、以下ではできる限りこれとは重ならない論點について述べておきたい。

第一に、本書は、全體としては、一九一〇年代の留學生運動から二〇年代初期の社會主義運動へと連なる流れに沿ってこの時代の獨立運動の展開を描いている。しかし、この潮流が當時期の獨立運動の全てであったわけではもちろんなく、また、必ずしも主流であったとすら言いがたい。本書で名のあがっている一九一〇

年代の朝鮮人留學生のなかには、李光洙や金雨英のような民族主義右派や親日的と目される人物もいる。すなわち、一九一〇年代の留學生運動は二〇年代の多様な運動に流れこんでおり、その影響は本書で扱われた社會主義運動ばかりでなく、より穩健な實力養成系列の運動や親日的運動にも及んでいるのである。たとえば、一九一〇年代の日本留學經驗者の中には、三・一運動後に朝鮮内で胎動した實力養成主義的な青年會運動のリーダーとなった者もおり、留學時代の日本の青年運動についての見聞が朝鮮での青年會運動に活かされた可能性を指摘する研究もある。[2]

また、朝鮮・中國・臺灣における共產主義組織の形成ルートとして本書が重視する韓人社會黨―朴鎭淳の工作は、必ずしもソビエト・ロシア側の全面的承認を受けたものではなく、對中國工作の中では「傍系」だったとの評價を受けている。[3]著者はこうした事實は十分承知していようが、留學生運動から社會主義運動への聯續性を強調し、東アジアにおける共產主義運動組織の聯動性を示すためか、本書ではほとんど觸れていない。

著者が描いた一九一〇年代から二〇年代にいたる道筋が朝鮮獨立運動の重要な一面を照射した意義は全く否定しない。しかし、逆に、その道筋以外のさまざまな運動については十分に論及していないために、朝鮮獨立運動の特定の一面だけを切り出して見せたという印象が殘る。特に獨立運動が多様化した一九二〇年代についてはその感が強い。同時代の朝鮮獨立運動について全體的な見取り圖を描いた上で、本書の論じた運動が占める位置を示すという手順を踏むべきだったのではないだろうか。

第二に、本書の意義として、在日朝鮮人運動と社會主義運動という二つの領域を横斷していることを先に指摘したが、反面、いずれの運動についても完結した分析にはなっていない。本書の扱った時期以降、在日朝鮮人運動は、一握りの留學生・知識人の運動から勞働者を基盤とする大衆運動へと展開していく。社會主義勢力は、朝鮮内で民族主義右派に對する批判を通じて運動の主導權を手にし、民族主義左派との協同戰線を形成する。すなわち、どちらの運動も一九二〇年代初期を分水嶺として本格的に開花していくわけである。しかし、殘念ながら本書はその手前で筆をおいている。本書をいわば「序說」として、筆者の分析が今後、獨立運動の本格的な高揚期にまで進んでいくことを期待したい。

第三に、獨立運動の外的條件については細密に檢討されている反面、思想分析についてはやや淡泊な印象を受けた。一例のみあげれば、筆者は、一九一〇年代から二〇年代の東アジア民族運動の性格變化を「反日本帝國主義から共產主義」への變容と整理しているが、果たしてそのように捉えてよいのだろうか。朝鮮人にとってマルクス主義が民族解放理論として受けいれられたことはしばしば指摘されるところである。[4]少なくとも朝鮮については、「反日本帝國主義」から「共產主義」へという單線的な變化ではなく、後者に前者の理念も包含されていたととらえる方が實態に卽しているのではないだろうか。

批判めいたこともいくつか書いたが、本書が朝鮮史あるいは東アジア各國史に携わる研究者に廣く讀まれてほしいという思いは變わらない。ナショナル・ヒストリーを脫構築する、一國史的枠組みを超える、といったかけ聲は現在朝鮮史に限らず盛んである。

しかし、そのような視點を學問的嚴密さを失うことなく研究に反映させることはさほど容易ではない。手堅い實證をともないながら近代東アジア史の重要な一面を切開して見せた本書は、その意味でも貴重な實踐であり一讀の價値がある。

註

（1）たとえば、尹海東は、帝國日本の植民地支配を捉える視座として、民族主義的な歴史學に代置される「トランスナショナル・ヒストリー」を提唱している（尹海東［裵貴得譯］「トランスナショナル・ヒストリーの可能性」（『季刊日本思想史』第七六號、二〇一〇年）。

（2）朴贊勝「一九二〇年代初期の朝鮮における青年會運動と支配當局の對應」（松田利彦編『（第四〇回　國際研究集會報告書）植民地帝國日本における支配と地域社會』（國際日本文化研究センター、二〇一三年）。

（3）石川禎浩『中國共產黨成立史』（岩波書店、二〇〇一年）一五四～一五九頁。

（4）たとえば、Michael Edson Robinson, *Cultural Nationalism in Colonial Korea, 1920-1925* (Seattle, University of Washington Press, 1988) p. 108, 126.

二〇一三年三月　京都　思文閣出版
A五判　六＋四〇一＋一二頁　七五〇〇圓＋税